

国際麻酔科学史シンポジウムの歴史

——第10回大会日本招致成功によせて——

牧野 洋¹⁾, 土手健太郎²⁾, 菊地 博達³⁾, 松木 明知⁴⁾

¹⁾ 浜松医科大学医学部麻酔・蘇生学講座, ²⁾ 愛媛大学附属病院集中治療部,

³⁾ 我孫子東邦病院, ⁴⁾ 弘前大学名誉教授

国際麻酔科学史シンポジウム (International Symposium on the History of Anaesthesia: ISHA) は4年に一度、世界各国から麻酔科学史の研究者が一堂に会し、麻酔科学史研究の成果発表を行うビッグイベントである。第一回大会は1982年オランダのロッテルダムにて開催され、2017年の第9回 Boton 大会まで主に欧米諸国で開催されてきた。Living Legend とも呼べる麻酔科学の大家による特別講演や、麻酔科学史に関する一般演題、開催地の歴史に関する講演などおよそ3日間の開催期間に数多くの歴史プログラムが組まれる。公式パーティなどを通して、著名な研究者と親睦を深めあうことができ、参加者は麻酔科学史漬けの3日間を通して、麻酔科学史研究に対するモチベーションを高めることができる素晴らしいイベントである。

日本麻酔科学会は、日本の麻酔科学史研究を深化させると共に、日本の麻酔のあゆみを世界に向けて正しく発信することを目的として、ISHA 第10回大会 (2021年開催予定) の日本への招致活動を行う事を決定し、麻酔博物館委員会を中心とした招致委員会を発足させた。招致にあたり、麻酔科学会の草創期に世界麻酔学会大会を日本に招致する事に成功された、山村英夫先生の言葉 (2014年日本麻酔科学会) が参考にされた。山村先生は、「知り合いになるということは非常に大事なことです。ことに外国人との個人的な付き合いをするというのが非常に大事ですね。それはいわゆる規則とか理屈ではないのです。個人的にいろいろ親しくなりますと、何かを頼むときは非常に頼みやすくなる。一種のロビー活動といってもよいでしょう。」と発言された¹⁾。そのお言葉に従い、各招致委員が米国および英国の麻酔科学史学会に参加・発表し、人脈を築いた。また、有力な麻酔科学史研究者の先生方を日本麻酔科学会学術集会時の博物館委員会企画に特別講演として招聘し、特別講演を行ってもらうとともに、神戸の麻酔博物館を訪れていただき、日本の麻酔科学史に興味を持っていただく事につとめた。

2017年10月にBostonで開催されたISHA第9回大会において、次期開催地を決める招致 Bid meeting が開催された。招致プレゼンテーションでは、群馬大学麻酔科の齋藤繁教授と帝京大学の中田善規教授が登壇し、第10回大会が開催される2021年はちょうど麻酔博物館開館10周年にあたる事、特別講演として、華岡青洲、日本の麻酔科学史、日本の医学史に関するものをそれぞれ各分野の第一人者をお願いする事、日本麻酔科学会第68回学術集会と併催することにより、①麻酔科学会からの Financial support があり安定した大会運営ができる事、②学術集会に参加した一般の麻酔科学会会員にも ISHA の講演を聴講できるようにして、一人でも若い麻酔科医に麻酔科学史に興味を持ってもらう事を目指したいとの熱い思いをプレゼンテーションした。ISHA2017最終日の10月27日、Bid meeting の議長を務められたオーストラリアのChristine Ball先生から次回、ISHA2021の開催地は“KOBE”との発表があり、歓声が上がった。

日本麻酔科学会ではISHA2021招致委員会を実行委員会に改組し、2021年に向けた準備を加速させていく予定である。日本医史学会会員の皆様からも、是非ご助言やご協力を頂戴できますと幸いです。